

親鸞における身心の把握

鍋 島 直 樹

序 問題の所在

仏教における思惟形態は、知的思弁を繰り返すことではなく、仏道実践を通じて、身心全体にかかわる全人格的な思惟形態である。全人格的思惟については、既に王城康四郎博士の指摘するところであるが、自己やものを捉える場合に、単に頭脳的に思考を働かせるのではなくて、仏道修習という全人格の身体の思惟によって、主観と客観の対立を超えて、主観と客観とが一つに融解し、対象を対象の中から捉えようとするものである。ここにおいて仏教における思惟と智慧は、認識論的な知性の営みではなく、主体的、実践的な身心全体の営みであると考えられる。それは、滅諦が道諦という仏道を歩むことによって達成されるところによく表われている。しかしながら、ともすれば西洋の宗教学的な見地からすれば、信仰は理性や感情、意志などの精神的な営為として理解されがちである。そこには、宗教的人格のうちで、人間の身

体性の問題は軽視されている。したがって、この小論では、仏教の思惟形態の特徴である「身心一如」の問題に注目しながら、解脱にかかわって身心がどのように捉えられてきたかを概観し、さらに日本浄土教における親鸞が、この肉体の問題を成仏、信心にかかわって、どのように把握していたかについて考えてみたい。

一 仏教における身心の把握

先ず身体は、原始仏教以来、不浄に満ち、無常な存在であると説かれている。『スッタニパータ』に、次のような文言がみられる。

「身体は、骨と筋とによってつながれ、深皮と肉とで塗られ、表面は覆われていて、ありのままに見られることがない。……また身体が死んで臥す時には、膨れて青黒くなり、墓場に捨てられて、親族もこれを顧みない。……人間のこの身体は、不浄で悪臭を放ち、(花や香を以て)まもられている。種々の汚物が充滿し、

ここかしこから流れでている。このような身体をもちながら、自分分は偉いものだと思ひ、また他人を輕蔑するならば、かれは八見る視力が無い、という以外の何だろう。」(一九三二〇六偈) また『大宝積經』所収の「仏説入胎藏會」にも、次のように説かれている。

「此の身は、恒に是れ一切不淨の窟宅にして、體は常住に非ざるに、この愚痴の物は、誘狂して人を迷わす」

このように身体は、汚物の充滿した不淨な窟宅であり、その自己の肉体の堅固さをおごり、それを頼みとして他者を輕蔑したり、自己の肉体の無常さを忘れて永遠であると思ひ続けなくてはならないと厳しく批判されている。この肉体の不淨性に対する洞察は、その他にも『雜阿含』卷七二などの多数の文獻に見られる。そしてこの身体觀は、後世、不淨想という仏道として展開し、源信の『往生要集』の人道の章にまで繼承されている。したがって仏教では、身体の不淨さを不淨さとして、虚仮を虚仮として、ありのままに見究めることにより、肉体への執着心を捨てて、解脱にいたることをめざしていたといえよう。

しかし一方で、身体が心と一緒に説かれる場合には、その主体者の身心全体が解脱に触れていると捉えるところがある。『法華經』に、

「身体 (kāya) 及び手足は、靜然として安じて動じたまはず、そ

の心は常に憍怕たんぱにして、未だ曾て散亂することあらず、究竟して、永く寂滅し、無漏の法に安住したまへり。」

という文章があるのも、その一つである。ここでは、さとりを開いた仏の身心全体が、靜寂さの中に歸し、不動にして散亂していないことを明らかにしている。また仏教では、本来、人間の生存を心と身体の全人格的な営みとして捉えてきている。例えば、人間の生存を「五蘊仮和合」として捉え、人間が身体を意味する「色 (rūpa)」と、心に属する「受 (vedanā)」「想 (saṃjñā)」「行 (saṃskāra)」「識 (vijñāna)」との両面によつて生成していると理解する。この五蘊の思想をまとめた「名色 (nāmarūpa)」という表現は、心と肉体との切り離せない關係を單的に示している。さらにまた、このような身心一元論的な把握は、「色心 (rūpa-citta)」「身心 (kāya-citta)」という見方にも表われている。

先ず色心一如の思想は、天台教学の湛然によく見られる。湛然の『止觀輔行伝弘決』に、次のように説かれている。

「離色無心、離心無色。……当知若識若色皆是唯色。若識若色皆是唯識。」

ここで湛然は、天台の本覺思想に立ちながら、眞実が万法に顯われ、また主体者の身 (色) にも心にも平等に現成すると述べ、色心一元論を主張している。次に、身心一如の思想については、道元の思想の中に色濃く表われている。『正法眼

蔵』の辨道話に、

「仏法にはもとより身心一如にして、性相不二なりと談ずる、西天東地おなじくしれるところ、あえてたがふべからず。いはむや。常住を談ずる門には、萬法みな常住なり、身と心とをわくことなし。」

と記して、道元は、生死即涅槃という大乘仏教の哲理を踏まえながら、身心を離れて涅槃、常住はないことを明かしている。また自らの証悟体験を、如浄の言葉を承けて、

「参禅とは身心脱落なり。」（『宝慶記』）

と表現しているのも、参禅という仏道自体が、身心脱落という証悟と一つになって捉えられていることをよく表わしている。道元における証悟とは、法が身心全体に透徹することの意味していたわけである。そしてそのために自己の身心全体を放下して、仏法的大海に入るべきことを勧めている。

かくして、仏教においては、原始仏教以来、大乘仏教にいたるまで、一貫して身心一如の思想を保ちつづけた。身体が、その形態（rūpa）の側面からは、不浄なる器であると否定的に捉えられながらも、心と身の全人格的な側面から見るときには、この身体（kāya）は、解脱そのものに触れており、仏道修習を通じて、身心を含む主体の全人格が、その閉鎖的な自己執着を破って、法の浸透した身心へと転ぜられてゆくことと把握されていたといえよう。いずれにしても、この身心一如の思

想は、仏教的思惟の根底にかかわる問題であり、心の精神作用を身体と切り離してみる考え方は、仏教においては稀薄であったと思われる。仏教において、論理的思弁を否定する仏道が重視されたのは、めざすべき解説が身心の全人格性にかかわっていることを意味している。

二 親鸞における身心の把握

それでは親鸞においては、この仏教の身心一如の思想はどのように承けつがれ、把握されているであろうか。結論的に言うならば、親鸞は、身心一如の伝統を継承した側面をもちながらも、さらにその肉体のもつ虚妄性について徹底的に見つめつづけた独自の側面がみられる。ここではその肉体性の問題について特に考えてみたい。

親鸞は信心について、

「本願ころにかけしめて つねに弥陀を称すべし」（『高僧和讃』真宗聖教全書二の五〇一頁下）

「信心は如来の御ちかひをききて、うたがふころのなきなり」

（『一念多念文意』真聖全二の六〇五頁）

などと明かしているように、信心は如来の本願を心に領受して、疑いの晴れた心的境位を意味する。即ち、本願は疑蓋無雑の信心、心を通して領納されるわけである。しかしまた親鸞も、心を通して領受した仏の光明が、身にも届いていると

述べているところがある。

そしてその親鸞にみられる身心一如の思想は、すでに浄土教思想にも所々に見られ、それを親鸞が承けていると考えられる。先ず、仏の大悲、本願にかかわる身心については、無量寿経』第三十三願に、

「諸仏世界の衆生の類、我が光明を蒙て、その身に觸るる者の、身心柔軟にして人天に超過せしむ。」（『信巻』真仏弟子釈引用）

と説かれ、『如来会』巻上に、

「彼の光明、清浄廣大にして、普く衆生をして身心悦樂せしむ。」

（『真仏土巻』引用 真聖全二の二二頁）

と説かれ、憬興の『述文賛』にも、

「皆是光觸を蒙る者は、身心柔軟の願の致す所なり。」（『真仏土巻』引用 真聖全二の一四〇頁）

と注釈されている。したがって『無量寿経』では、阿弥陀仏の光明に触れることが、身心全体を和らげ柔軟にして、悦樂させると説いている。また善導は『観經四帖疏』散善義に、
「此の人既に此に遣はし彼に喚ばふを聞きて、即ち自ら正しく身心に當てて決定して道を尋ねて直ちに進んで……」（『信巻』引用）と述べ、主体者の仏道の方が決定し、信心が決定することを、身と心に決定すると表現している。そして親鸞自身もまた、信心の悦樂を、身心全体の悦樂として告白している。

『一念多念文意』に、

親鸞における身心の把握（鍋島）

「歡喜といふは、歡はみによるこぼしむるなり、喜はこころによるこぼしむるなり。」（真聖全二の六〇五頁）

と語り、『信巻』に

「歡喜といふは、身心の悦豫を形す見なり。」

と書かれているのは、その身心全体の歡喜を示している。さらに親鸞には、信心において仏の大悲、功德が、主体の全人格性に触れているという表現が見られる。『尊号真像銘文』に、

「本願力を信樂する人は、すみやかにとく功德の大宝海を信ずる人のそのみに満足せしむるなり」（真聖全二の五八六頁）

と記され、『高僧和讃』にも

「五濁惡世の衆生の 選択本願を信ずれば 不可称不可説不可思議の 功德は行者の身にみてり」（真聖全二の五一五頁）

と記されている。この場合の「身」は、形態的な身体の意味にとるよりも、心の精神作用を含めたもの（*psyche*）であり、むしろ人格的存在を意味していると考えた方がよいかもしれない。いずれにしても、親鸞にも身心一如の思想がみられ、それは、主体の身心を含む全人格的身体が、仏の光明に触れ包まれていたことを意味していた。

しかしながら親鸞は、一方で、仏の真実に出遇えば出遇うほど、人間存在全体が煩惱におかされていることを深く自覚している。虚妄にして苦惱する身心の把握である。そのこと

は『涅槃經』の中で、阿闍世の苦悩を身心の両面から捉えているところによく示されており、親鸞自らも『唯信鈔文意』に、

「煩は身をわづらはすといふ、悩はこころをなやますといふ」^⑩

と述べ、『一念多念文意』に

「凡夫といふは、無明煩惱われらがみにみちみちて、欲もおほく、いかりはらだち、そねみねたむころおほくひまなくして、臨終の一念にいたるまで、とどまらずきえず、たえずと、水火二河のたとえにあらはれたり。」^⑪

と記して、一生涯消えることのない煩惱が、身心に宿っていることを自覚している。かくして親鸞は、その身心全体が、仏の大悲に触れて柔軟になり歓喜していると捉えながら、同時にその身心全体は、仏の真実との出遇いを通して、いよいよ虚妄に満ち、生涯、無明性に縛られていると内省している。即ち、この主体の身心全体が、全分に仏の光明に触れつつ、またなお全分に煩惱の愚痴性を抱えつつづけているわけである。そしてこの無明性を宿した身心の救済の構造については、『唯信鈔文意』に、

「ひとすちに具縛の凡愚、屠沽の下類、無碍光仏の不可思議の本願、広大智慧の名号を信樂すれば、煩惱を具足しながら無上大涅槃にいたるなり」（真聖全二の六四六頁）

と述べられている。即ち、身心全体が煩惱に満ち虚妄である

という自覚のままに、真実の涅槃にいたるというのである。したがって、人間と仏、虚妄と真実とは全く相反しながら、その身心の虚妄性の只中に真実は現成し、無明なる身心が真実へと転成されてゆくといいうるのであろう。

最後に、親鸞には、肉体に対して心の優位性を語っている文章が、晩年の著作に見られるので、その点に注目してみたい。即ち、親鸞は従来の身心一如の理解とは異なつて、身心を分けて捉える独自の側面をもっている。『末灯鈔』第三通性信宛に、

「浄土の真実信心の人は、この身こそあさましき不浄造悪の身なれども、心はずでに如来にひとしければ、如来にひとしとまふすこともあるべし」^⑫

と書かれた文面からは、身体は不浄造悪であるけれども、心は如来とひとしきものをもっているという、身と心を分けた一面が見られる。またその同じ消息には、

「光明寺の和尚の『般舟讚』には、信心の人はその心すでにつねに浄土に居すと釈したまへり。居すといふは、浄土に信心の人の心つねにあたりといふころなり」^⑬

と記されており、後世この意趣を受けとって作られた『帖外和讃』には、

「有漏の穢身はかはらねど 心は浄土にあそぶなり」

と詩われている。この文章には、たとえ心が真実に触れ、す

でに浄土に住んでいるとしても、依然として、その心の自在にはならない肉体の問題が表面化している。ここに仏教の身心一如の思想にはない、親鸞独自のものがある。即ち、親鸞は身心一如の立場に立ちながら、なおその身体の想像を超えた煩惱性を深く顧みて、身心二元論的な思维の立場にあったと考えられる。この肉體性の問題は、存在の深い根源に根ざしており、人間存在自体の底知れる煩惱にかかわるものである。特に親鸞の仏道は、出家者の仏道ではなく、在家者の仏道であったところに、肉体の虚仮性を無視できない現実が存在していたのだらう。

かくして、この肉體性こそが、信心において最後まで残った続けた課題であり、それは仏の心を、そして主体の信心をつねに裏切る可能性を内に宿していた。親鸞が生涯、この世で証悟、成仏を語り得なかった理由は、この肉体の予想を超えた虚妄性、業異熟性 (Kamma-vipaka) の問題に基因していると考えられる。親鸞においては、如来の法が、主体の身心全体に触れて透徹しつづつあるといいつつも、なお肉体があるかぎり、主体の身体の源底にうごめている肉體性を看過できなかったわけである。仏の真実が主体に透徹すればするほど、その真実の法の中で、なお肉体の中に熟しつづけている虚妄性、業異熟性に触れ、その肉體性の不可知さにこだわりつづけたのであらう。そしてこのような肉體性への内省を通じ

て、自己から仏への可能性に絶望し、逆に仏から自己への働きかけを領受するという他力思想が深められていったと考えられる。しかし、この肉體性から生じる煩惱や業異熟性に気づき感觸してゆくことが、逆にそのまま親鸞における信心の深淵さともなっており、肉体の罪業性について徹底的に自覚する時に、そのまま仏の真実へと転依されてゆく思想をそこにみることができるよう。いずれにしても、原始仏教から親鸞にいたるまで、その仏道成立をめぐる、肉体を含めた全人格的身体が大きな問題であったわけである。

- 1 中村元訳『ブッダのことは』四六頁 岩波文庫
 - 2 仏説入胎藏会第十四 大正蔵一一の三三二下
 - 3 『法華経』化城喻品 大正蔵九の二二下
 - 4 大正蔵四六の三八八上—中
 - 5 『正法眼蔵隨聞記』第六
 - 6 中村元著『原始仏教の思想』上 一六—一八頁 春秋社
 - 7 真聖全二の七五頁
 - 8 真聖全一の五四〇頁、二の五六頁
 - 9 真聖全二の七二頁
 - 10 真聖全二の六二九頁
 - 11 真聖全二の六二八頁
 - 12 真聖全二の六六一—二頁
 - 13 王城康四郎『原始經典における業異熟の究明』一八〇—二〇五頁。『業思想研究』所収、平楽寺書店、昭和五十四年)
- △キーワード▽ 身心一如、信心、肉體性

(龍谷大学講師)